



#新型コロナウイルス

「中国で流行している新型コロナウイルス感染症、あらゆる可能性を“想定内”に」

岩田健太郎 (神戸大学医学研究科感染治療学分野教授)

2019年12月以降、中国の湖北省武漢市で肺炎が流行し、これが今まで知られていなかった新しいタイプのコロナウイルス (novel coronavirus [2019-nCoV]) が原因と判明した。当初59名と報じられた患者数は本稿執筆時点(2020年1月17日)で41名と訂正され、2名が死亡に至っている。12名は回復して退院した。死亡者のうち1名は60代の男性で、心筋炎を合併したという(国際感染症学会メーリングリスト ProMedによる [<https://promedmail.org/>])。もう1名の死亡例についても心筋炎や多臓器不全が認められたと言われる一方、結核を併存していたという報告もあり詳細は不明である。この他、タイと日本で1名ずつ輸出症例が発見されている。763名の濃厚接触者が追跡され、そのうち644名は問題なしとされて観察解除となり、119名は未だ観察中だ。

中国の肺炎といえばSARS(重症急性呼吸器症候群、severe acute respiratory syndrome)を思い出す。2002年から2003年にかけて、中国の広州を中心に流行した死亡率約10%のウイルス感染症だ。私は2003年から北京の診療所でSARS対策に従事した。SARSはマンション、ホテル、病院内でヒト-ヒト感染が多発し、医療者の罹患も多かったために北京市内での診療は極度の緊張をもたらした。

当時の中国はまだ医療制度も診療体制もしっかりしておらず、SARSの情報公開が不十分で実態把握に苦労した。この時の反省を受けて中国では疾病予防対策センター(中国CDC)を充実させ、感染対策の質を高めてきた。現在では世界保健機関(WHO)などからも高い信頼を得ている。今回の肺炎でも新型コロナウイルスの遺伝子配列情報は即座に世界に公開され、タイや日本での診断の一助となった(日本経済新聞電子版1月16日)。

このウイルスはどこからやってきたのか。詳細は本稿執筆時点では不明だが、武漢の海鮮市場と多くの患者に関連が高く、ここがウイルスの発生源ではないかと疑われている。中国当局は海鮮市場をただちに閉鎖し、新規の患者は発生しなくなった。ヒト-ヒト感染も起きているであろうことが推察されるが、どのくらいの感染力があるのかは現時点では不明である。ざっくり言えば感染力、致死力などいずれもSARSほどのインパクトはなさそうだが、プレマチュアな断定は禁物だ。

現時点では「分からないこと」がたくさんあるなかで、我々医療者に必要なのは冷静であり続けること。しかし油断もしないこと。「分からないこと」に自覚的であり、曖昧さに耐

えること。意外な新情報にも驚かないこと。つまり、あらゆる可能性を「想定内」にしておくことである。

(編集部注:本記事は1月17日にWEB医事新報に掲載した記事を転載しました)



#新型コロナウイルス

「新型コロナウイルス(2019-nCoV) 案件、今後の注目点～北京におけるSARSの対応経験から」

勝田吉彰(関西福祉大学社会福祉学研究科教授)



筆者は前職の外務省医務官時代の2003年に、SARS(重症急性呼吸器症候群、severe acute respiratory syndrome)のアウトブレイクに見舞われた北京で、日本国大使館医務官として情報収集や在留邦人ヘリスクコミュニケーションの任務にあたっていました。まったく未知のコロナウイルスが現れて何が起こる可能性があるのか。当時と比べて今後の注目点を紹介します。なお、本稿の執筆時点(1月19日)から掲載までの数日間のタイムラグで答えが出ていたり異なる展開になっている場合も考えられますが(それぐらい速く事態は展開します)、ご了解下さい。

1. スーパースプレッダーが現れるか否か

1人の感染者から、より多くの健常人に感染させる“スーパースプレッダー”。この出現の有無で、感染者数とはもとより報道量もガラリと変わります。これまでのコロナウイルス案件、SARSやMERS(中東呼吸器症候群、middle east respiratory syndrome)ではスーパースプレッダーの出現で社会の雰囲気が変わりました。『香港のメトロポールホテルで医師が…』『内蒙古自治区で航空機客室乗務員が…』など、今でも紙面が記憶に残る出来事です。

新型コロナウイルスでは、本稿執筆時点では家族内感染が疑われるのは2例のみで、世界保健機関(WHO)の声明も「限定的なヒト-ヒト感染の可能性が示唆される」とどまるところから始まっていますから、過去のコロナウイルス案件同様のスーパースプレッダーの出現があれば、一般社会の雰囲気の「変化率」はより大きなものになると思われます。

2. 医療従事者の感染が現れるか否か

ヒト-ヒト感染の指標になるのが「家族内感染」と「医療従事者の感染」です。現時点では、少なくとも医療従事者の感染は報じられていません。今後「医療従事者の感染」が出現する事態になれば、これも大きく社会の雰囲気を変える事態になります。SARSではこれが頻繁に発生して現場は悲壮感に満ち、中国政府は現地メディアを通じて「白衣戦士に敬礼を！」と士気鼓舞に努めていました。

3. 外国籍/著名人の感染者が現れるか否か

もうひとつ当時の北京で雰囲気が大きく変わるきっかけになったのが、「国際労働機関(ILO)要人の感染・死亡例」でした。今回も著名人・芸能人の感染が発生すれば雰囲気は一変するでしょう。

4. 春節の移動ラッシュ(春運)はどう出るか

春節期間中に増えるインバウンド旅行者による感染持ち込みに関心が集まっているように見受けられますが、実際のところ焦点はそこではありません。国内メディアが心配する、航空機で来日する中流層以上よりも深刻なのは、庶民層の帰省列車でどう拡大するか、で